沈清伝の変容とサヨヒメ説話との比較

――シンポジウム3・物語の変容――

矢野百合子

研究会では「沈清伝」と「観音寺縁起」、サヨヒメ説話との比較を通して、社会の価値観や聴衆、採集者や研究者の視点等、物語に変容をもたらす契機について簡略に発表させていただいた。「観音寺縁起」については既出の論考があるので、[註1]本稿では「沈清伝」の異本を通して、聴衆層の上昇がもたらした変化を概略するとともに、サヨヒメ説話との比較も交えて、社会の価値観が物語に与えた影響を、孝心、神仏との関係、盲人の三つの視点で考えてみたい。

一、朝鮮の民間芸能パンソリ

十七世紀におこったとされるパンソリは、十九世紀に支配層を含む広範囲な聴衆を得るまでは、賤民芸として蔑視されていた。十八世紀中頃までのパンソリは平民を主な聴衆とし、口伝えの昔話をもとに、演者である賤民と聴衆である平民の経験と関心にあわせて作品化されたと考えられている。パンソリの演者は広大と呼ばれる芸能民に属し、その舞台は唱者と伴奏者（鼓手）の二人によって構成されるいわば独り舞台であるため、ある程度の空間さえあればどこでも上演が可能であった。市のたつ村の広場や富豪の家の庭で、祭りや祝いの余興として才人（曲芸師）等の他の芸人たちと混じって上演されたという。

経済的な基盤を純粋に芸能的評価に頼らねばならなったパンソリ演者は、聴衆の興味と感動を呼び起こすために技巧と内容を発展させ、聴衆の経験と関心にあわせた挿話を組み入れ、民謡・巫歌・雑歌等の要素を吸収して音楽性を高めていった。そして十八世紀の中頃には、支配層である両班の詩人柳振漢に「漢詩春香伝」を書かせるほどに、文学的ないし音楽的にも高い水準をもつ芸術として成長したと思われる。[註2]

十八世紀の末にパンソリは新たな展開期を迎える。平民を聴衆としていた時代から、両班、官僚、富豪等をより重要な基盤とする段階への移行が進んだ結果、パンソリは新しい聴衆にあわせた内容と形式を指向しはじめたのである。科挙及第を祝う「遊街」や還暦の祝宴などの機会を通して、パンソリは両班の家に入り込み、他の民

衆芸能に比べて洗練度の高いパンソリに対する両班たちの関心も高まっていった。パンソリは両班の趣味と美意識に基づいた批評に耐えうるものへと変化した。そして、パンソリ辞説（台本）の文章としての洗練度、唱者の容貌や声、音楽的表現、身振りと演技、楽士の囃子方などを基準とする名唱（国唱）の呼称がうまれ、その系譜が作られるまでになったのである。[註3] 名唱は破格の待遇をうけ、そうでない者は賤民芸能者として一生を終えるという差別化が、演者の競争意識をあおり、民衆芸能から高度な技術をともなう芸術へという軌道へとパンソリを押し上げたのである。

こうして、賤民芸術として出発したパンソリは、十九世紀には支配層を魅了し、好事家たちの後援を得るようになった。なかには中人階級の富豪申在孝のように、広大たちを食客として養いながらパンソリを教え、パンソリ論「広大歌」をはじめ、パンソリ辞説までも再創作する教養人もあらわれた。[註4] パンソリの洗練に申在孝の果たした役割は非常に大きい。しかしまた同時に、申在孝のような知識人の存在と両班たちの好意は、パンソリから初期の庶民的な内容を失わせ、新しい後援者である両班の趣味にあった内容へと変化させたという意味で、パンソリにとっては両刃の剣であったかもしれない。実際、十九世紀初期の文献にあるパンソリ十二篇のうち、現存して上演可能なものは五篇にすぎず、それぞれ忠・孝・知・友愛・貞烈を代表する作品とされている。そして断片的な記録や同名の小説本の内容からは、失われたパンソリの方が風刺や反体制的な刺激的内容に富んでいたと推測されているのである。

二、沈清伝研究の概要

文学・民俗学における沈清伝研究は、異本考証、根源説話論、主題・思想論を中心におこなわれてきた。また社会学、精神分析学、構造主義、神話批評等の方法論を援用した研究も若干ある。

現在確認されている沈清伝の異本は、パンソリ採録を含めて八〇種を越えており、文章体小説・パンソリ系小説・パンソリ辞説に三分類されている。パンソリ系小説とは一般に完板（全州版）をさし、文章体小説である京板（特に翰南本）と比較されて、成立の前後関係が論じられている。また筆写本の大半を占めるパンソリ辞説は、十九世紀後半の江山制（唱法の一つ）の成立を境に、初期沈清歌と後期沈清歌とに分けることができる。

パンソリは十九世紀末までは主に全羅・忠清道を中心に盛んに行われ、演者も全羅道出身が多かった。このことからパンソリの起源を湖南地方の叙事巫歌にもとめる説が最も有力視されている。叙事巫歌とパンソリの形式と内容はよく似ている。しかし巫俗の世界観を基盤とする叙事巫歌に対して、パンソリは人間の日常的な事件を扱う口承叙事詩であり、その写実的な描写が特徴とされている。

沈清伝の起源については、まず金台俊が『三国史記』の「孝女知恩」、『三国遺事』の「居陀知」および「観音寺縁起」を提示し、金泰坤は巫歌起源説を論じた。申東一は東海地方の巫歌「沈清クッ」を起源とする巫歌起源説を主張し、印権煥は仏教孝子譚起源説を唱

えた。その後、構造研究が進む中で、沈清伝を構成する説話群の分類作業が盛んにおこなわれたが、最終的に鄭夏英が開眼説話・処女生贄説話・英雄説話の三つの下位構造のうえに、出生譚・盲人の失墜・異人の救出等々の十七の話素が持ち込まれて形成されたという図式を提示して、根源説話論に一端終止符をうった。(註5)

次に主題・思想論であるが、沈清伝は一般的に「孝」の物語として知られている。しかし、その「孝」の背景が儒教、仏教、道教、巫俗あるいはその幾つかの混合であるとの主張がある。主題については、沈清伝のもつ二面性を、表面的主題である「悲壮」と裏面的主題である「滑稽」の二つの調和の結果であると論じた趙東一の研究が有名である。(註6) その他に「悲劇的浄化」「犠牲的懺悔・悲願による往生極楽」「人間意識の覚醒」「自己犠牲の価値」等を沈清伝の孝の中に見いだそうとする研究もある。

三、沈清伝・沈睛歌・沈清クッの概要と構造

沈清伝の異本の共通項は、次のように整理することができる。

子のない夫婦が祈願し沈清を授かる　（出生譚）
母は死に、盲目の父は貰い乳で子を育てる（母の死・父の苦労）
沈清は乞食をして父を養う　（孝女）
溺れかけた父は托鉢僧に救われる　（父の失墜・異人の救出）
父の開眼のために身を売る決心をする　（開眼方法の提示）
龍王の生贄を求める商人に身を売る（商人の登場・身売り孝行）
天帝の命令で沈清は龍宮に迎えられる　（天帝の援助・龍宮譚）
龍王は花蕾に沈清をいれて海上に送り返す（天帝の援助・変身）
商人は花を皇帝に献上する　（天帝の告知・再生）
皇帝は沈清を皇后とする　（貴人との結婚）
沈清は盲人宴を開き父をさがす　（盲人宴）
父は悪妻に裏切られて苦労する　（悪妻の背信・父の放浪）
父娘は再開し、驚きの中で父は目を開く　（開眼・後日譚）

以上のあらすじでもわかるように、現在伝わっている沈清伝は孝女沈清の物語であると同時に、父娘二人の主人公をもつ物語でもある。異本のほとんどは、父娘→娘→父→父娘の順に主人公をかえて展開し、娘が非人間的ともいえる卓越した孝女でありつづける一方で、父は欲望にのめり込んで裏切られる悲惨さと滑稽さを兼ね備えた人間として描写されている。おそらくは後に挿入されたのであろうこの父の物語によって、沈清伝は拙稚な孝女伝の単純さを免れることができたのではないかと思う。あらすじからみると、沈清伝は、沈清が孝行のために自らを犠牲とする話、父が娘の助けで開眼する話、舟人が水神に生贄を捧げる話の三つの部分からなっており、共通する基本構造と細部構造は次のように整理できる。

沈清の誕生：子授け祈願、母の死、盲父の子育て、沈清の父扶養、父の失墜、異人の救出、開眼方法の提示
身売り孝行：身売りの決心、商人の登場と身売り、父の嘆き
人身御供：生贄、天帝の援助、龍宮譚、神仙による保障、王との結婚
再会と開眼：盲人宴、悪妻の背信、再会、父の開眼、後日譚

沈清伝の細部構造の変化

	a完板A本　推定一九〇五	b申在孝本　推定一八七〇	c朴順浩本　推定一八世紀	d沈清クッ　一九七一採集
子授け祈願の対象	名山大刹、霊神堂、古廟叢祠、城隍祠。諸仏菩薩、弥勒、七星、羅漢、帝釈、華厳、神将、山神。卓衣・引燈・窓糊の布施。家では竈の神、成造神、地神	名山山神。大刹仏。弥勒。古廟、叢祠、城隍祠。堂山、天龍、竈王。成造神帝釈天、三神	名山大刹、霊神堂の釈仏履歴のよいところに散財仏供引燈布施	名山大刹、霊神堂。淑女忠寺、石王寺。石仏菩薩、弥勒様。家では竈神、成造神
仙女が夢で告知（甲子四月初八日）	鶴に乗って。彩衣に月佩、花の冠、手に桂の枝。月の精か南海観音のよう。「西王母の娘。上帝に得罪して下界。太上老君と后土夫人諸仏菩薩、釈迦の指示で来た」	鶴に乗って。彩衣、手に桂の枝。「西王母の養女。文昌星の婚約者。文昌星が天命で下界したので従ってきた。夢恩寺の仏の指示できた」	手に桂の枝。「天上の太乙仙官の娘。上帝に得罪して下界」	鶴に乗って、彩衣に月佩、花の冠、手に桂の枝。「西王母の娘。上帝に得罪して下界。退恵山の老嫗ハルミ屈土夫人、諸仏菩薩、釈迦の指示できた」
母の死と貰い乳の苦労	産の病			産後すぐに働きに出て重労働をしたため倒れて死ぬ
沈清の父供養	六、七歳から一人で乞食。村人は孝女だと誉め讃える	十五歳から一人で乞食。追い払われたり、同情される		五歳で父を導き、七歳から一人で乞食。村人は同情的
父の救出	川に落ちた父を夢恩寺の僧が救い供養米三百石を勧進する			
	僧は笑うが、父は寄進を約束する	沈清は身売りも厭わぬといって寄進を約束する	父はとっさに寄進を約束してしまう	僧は笑うが、父は記帳せねば乱暴するといって無理に記帳させる

身売りの決心	中国航路の龍王への生け贄を求める商人に身を売る				
	父の過失（失明）を自分に移して開眼させてくれと神仏に祈る	身売りの相手を求めて神仏に祈る	米　三百石を求めて神仏に祈る		
父との別れ	最後の餐を準備して別れをつげる。父は自分が死ぬと嘆くが、商人は誠意を村人に託して沈清を連れ去る				
	商人は米二百石、三百両、綿布・麻布を村人に渡して父扶養のために利殖の方法を教える。張丞相夫人は沈清の肖像を描かせ、沈清は書を残す	商人は米二十石、百両をわたし、沈清は村人に父を頼む	商人は米百石、百両をわたし、沈清は村人に父を頼む	契約段階で商人は米百石、三百両を別途にわたすと約束する。村人に頼む。張丞相夫人は沈清の肖像を描かせ、沈清は書を残す	
人身御供	瀟湘八景。娥皇・女英の二妃、伍子胥、楚の懐王、屈原が慰労。祭祀餐を準備して祭文を唱えたのち、沈清は父の開眼を天に祈り、海に身をなげようとするが、一瞬気絶し正気にもどったのち「アイゴアイゴ、父さん、私は死にます」と身をなげる	祭祀餐を準備して祭文を唱えたのち、沈清は父の開眼を天に祈り海に身をなげる（ACのような死に方では孝女には不足と解説しながら場面を進めている）	海カラス・杜鵑が慰労。カラス・青鳥に父への便りを呼びかける。沈清は父の開眼を天に祈り、正気を失って笑い、四肢を震わせながら舳先にたどりつき、気絶した後、正気に戻って目をつぶり、裾を頭からかぶって「アイゴ、父さん」と身をなげる	瀟湘八景。二妃、伍子胥、楚の懐王、屈原が慰労。祭文を唱えたのち、沈清は故郷の方角を拝礼して「父さん、私は死にます。早く得明して天地万物を見てください」といいのこして裾を頭から被って海にとびこむ	

龍宮譚	上帝は龍王に命じて沈清を龍宮でもてなさせる。上帝の命で、龍王は沈清を花蕾に入れて海上にもどす	龍宮の詳細描写。玉真夫人（母）との再会。張丞相夫人は肖像画の変色で沈清の死を知り葬儀。父は堕涙碑をたてる	三年後に送りかえす。瀟湘八景。二妃、伍子胥、屈原が皇后となることを予言し皇后としてのあり方を忠告する	三年後に送りかえす。瀟湘八景。二妃、伍子胥、屈原が自分たちの恨を世に伝えてほしいという	玉真夫人（母）との再会が中心
皇帝との結婚	船員は皇帝に海上の花蕾を献上し、皇后の死を悲しんでいた皇帝は沈清を皇后とする	船主が出世の方法として献上する。皇帝は降仙花と名付ける。皇帝が天帝の意思だとして結婚を決意	船員が孝女花と名付けて献上する。龍宮の侍女と家臣が天帝の意思だと保障	船員が献上して千金の値をえる。家臣が天帝の意思だと保障	（皇帝ではなく）鶴に乗った頭官が天上花を王に献上せよという。王は夢のお告げをうけて結婚
盲人宴を企画	皇后は皇帝には事情を隠して、盲人宴を開くように皇帝に頼む	皇帝に事情を打ち明け、使者を出すが、父は流浪して見つからない。一計を案じて盲人宴を開くことにする			
悪妻の背信と父の流浪	父は悪妻ペンドクと暮らすが、金がなくなるとペンドクは逃亡する	（龍宮譚の直後に挿入）ペンドクが接近。金を遣いはたして故郷を離れる途上、金持ちの黄盲人と示し合わせて逃亡	豊かになった父は色欲をだす。ペンドクが財産を遣い果たす。盲人宴への途上で見限って逃げる	ペンドクが押しかけ女房となる。途上で若く金持ちの黄盲人と逃げる	ペンドクは金を遣いはたすが、身ごもったと言い逃れる。途上で旅道具一切もって金持ちの黄盲人と逃亡

父の救出と再婚	水浴中に衣服を盗まれ太守に助けられる。牧童、臼をひく女たちとの掛け合い。夢のお告げで待っていたという安氏盲人と再婚	父は府院君、安氏を貞烈夫人。桃花洞住民は煙戸雑役免除。ペンドク処刑。沈皇后と安氏は同年同日に得男父の子は宰相、父は南平王となり八十歳で死亡。「世人よ。古今に違いはない。富貴栄華するとも人を軽んじるべからず。興盡悲来、苦盡甘来は人ごとにあるものなり。沈皇后の情けぶかき名は千秋の流伝なり」	（再婚なし）臼をひく女たちとの掛け合い	父は国舅となり一品の官、郭氏夫人に府夫人を追贈し墓地は王族と同等とする。桃花洞は皇后の沐浴邑として徭役免除。「史書にのみ伝えられては庶民に知られないので、命じてハングルに移させた。孝行の手本とするように」	水浴中に衣服を盗まれ通りかかった大守に助けられる夢のお告げで待っていたという安氏盲人と再婚
再会と開眼盲人全員の開眼	再会の衝撃で目が音をたてて開く。その音を合図のように盲人一同の目があく		「再び死んで上帝に頼む」という沈清に当惑するうちに目が開く。盲人一同「皇后は万民の母」と四拝すると目が開く	ペンドクと黄盲人を処刑。安氏夫人を継母として礼をつくす。別宮をたてて府院君に奉じ、夢恩寺の托鉢僧に万両を下賜。船員にも千両。乞食時代に慈悲をかけた人々に千両ずつ。「すべての盲人も一時に目があきその後は国泰民安で民草は万世を楽しみ太平にすごした」	再会の衝撃で目があく。（記述はないが全員目があいたことが後述される）
後日譚				黄盲人のみペンドクを盗んだ罪で目があかない。ペンドクは天罰（落雷）で死ぬ。安氏と再婚、七十歳で得男。張丞相夫人を呼んで泣いて喜ぶ。遊び仲間を呼んで侍女とし、乳をくれた夫人たちに褒賞金。母の墓に石碑。「息子を生もうと頑張らずに孝女を生め」（クッの終わりに孝行を讃え勧める詞が続く）	水浴中に衣服を盗まれ、裸で歩いて子供たちに囃される。太守に助けられ、夢のお告げで待っていたという安氏盲人と出会う 再会。玉真夫人が天から薬水を霧のように落とす。盲人一同も同時に目があく

前頁の図表(註7)のａはパンソリ系小説、ｂは申在孝による創作パンソリ辞説、ｃは初期のパンソリ辞説である。ｄは現在も上演される沈清クッの採録であるが、採取者によれば演者である巫女は「以前伝承していた女性がいたが、その名前は忘れた。自分は筆書きの本によって学び、悲しい場面などを多く挿入した」と語っており、古来の形式をどこまで継承しているかは測れない。沈清クッは一時期廃れていたため、ｄを巫歌起源説に当てはめるには無理があると考えられている。各作品ともに時代背景は中国の宋時代、場所はａｂは黄州桃花洞、ｃは仮想国である瑠璃国の五柳洞、ｄは語っていない。ｂは開眼のモチーフを意識して、主人公の名を同音の沈睛に変えている。父の名はａｄが沈ハッキュ、ｂは沈ハック、ｃは沈ウンである。母の名もａｂｄは郭氏であり、ｃのみが梁氏である。なお本稿ではとりあげない京板系小説では、背景は明時代、母は鄭氏で沈清三歳時に死亡、父は沈賢で、失明は夫人の死亡後となっている。(註8)

四、沈清伝の価値観――サヨヒメ説話との比較

○孝女沈清

日本のサヨヒメ説話と比較した場合、沈清伝に特徴的なのは孝女としての性格強化と結末での階級上昇、盲人全体の開眼である。サヨヒメは構想上の必然として孝女とされているが、沈清伝の前半部は、貰い乳で娘を育てる盲人の悲惨な生活と、父の恩に報いる幼い娘の孝行譚を描くためにある。沈清が物乞いにでる年齢が、初期沈清歌ｃの十五歳からａｂの六、七歳へと下げられたのは、謫降小説（貴種流離譚）の主人公として神聖化していく過程での作為であろう。村人の態度もｃの段階では同情ばかりではない。沈清は箒で追いはらわれ、犬に追われて、死んだ母に泣き言をいいながら乞食を続けるのであるが、ａｂでは村人全てが「出天之孝女」を讃えている。商人の態度も同様で、ｃでは入水を催促するが、ａｂでは同情的に描かれている。特にｂでは沈清自ら供養米の寄進を申し出ているだけでなく、生贄の場面でも当時のパンソリ辞説の〈痛々しいか弱い娘〉を批判し、孝女に相応しい死に方へと変えるよう主張している。このようなａｂとｃとの違いは、聴衆が支配層へと拡大した結果、パンソリの内容が変質していった過程を示している。劉永大は唱法の成立年代によってパンソリ辞説を初期本・後期本に分類しているが、それによると、父の出自が名門両班、母の徳行と沈清の高貴さ、英雄的行動の表現を含んだ唱本は、申在孝本以降のものである。(註9)また初期本には愚かで利己的な父の行動、村人の冷酷な扱い、生贄となる直前の人間的な葛藤、船旅の描写は短い等の特徴がある。

しかし孝の強調の程度とは別に、作品構造の根幹に組み込まれている卓越した孝女の物語は、沈清伝が基本的に孝女譚であることを示しているといってもいい。朝鮮半島において、孝は現在でも最も基本的な倫理とされており、各地の昔話・伝説にも孝行譚が多い。但し、朝鮮の孝行譚は基本的に儒教的な孝子・孝婦伝であって、沈清伝のような孝女伝は極めて少ないことにも言及しておきたい。

○神仏と人間の関係

まず巫歌であるdの沈清クッを見てみたい。前述したように、dは筆写本を根拠とし、表現にはaとの類似がみられることから、巫女が参照した筆写本が後期の完板本系であった可能性が強い。しかし、このdには明らかにabcと異なる点がいくつかあり、それは巫俗の伝統に基づいた巫女の取捨選択の結果であろうと思われる。

dは仏教に対して好意的である。父を救出する托鉢僧は「顔の形は白玉のよう。目は瀟湘江の波のよう。霜のようなる睫毛が上下を覆い、八文字の眉は新しき筆で描いたよう」と描写され、南無阿弥陀仏の字解きなどがクッの中に挿入されている。朝鮮の仏教は朝鮮王朝では弾圧され、僧は八賤の一つに落とされた。朝鮮仏教の特色は三国時代以来の護国仏教的な性格と、民間信仰との混合であろう。仏教は寺院内に七星堂などの巫俗を採り入れ、一体化が進んだ。朝鮮時代に同じ賤民とされた世襲巫と仏僧との関係からも、叙事巫歌の成長過程で、仏教がある程度の影響を与えたことは否定できない。

沈清はサヨヒメと同じく神の申し子であり、後期本では沈清の神聖化がより進んでいる。子授け祈願の対象は次第に複雑化し、cでは仏教神中心であったものが、abでは巫俗神中心となっている。cの後日譚では莫大な金を下賜された夢恩寺の僧は、abでは顧みられることもなく、むしろ霊験を疑われている。子授けの夢でも後期本には西王母が登場している。特にbでは下界の理由が、上帝への得罪から上帝の命令へ、しかも男女神の降臨へと変化して、父娘双方の神聖化の意図がうかがえる。再生の過程で出会う屈原・二妃等の会話の内容も、初期本と後期本では微妙な変化を見せている。

父を救った夢恩寺の托鉢僧の勧進によって沈清は身売りを決心するが、生贄の場面で沈清が祈るのはハヌルニム（天におられる方）で、仏の名は出てこない。沈清を救うのは玉皇上帝であり、夢恩寺の仏は父の開眼にも関わっていない。沈清伝の仏はサヨヒメの場合とはちがい有名無実の存在である。父の目が開くのは娘との再会の衝撃と感動の結果として描写され、沈清の再生も孝に感動した上帝の命令であって、沈清の仏教信仰によるものではない。

次に水神であるが、宋晩載の『観優戯』は龍王への人身御供を「波神の妻」と表現しており、(註10)当時の朝鮮の知識人たちは日本と同様の水神祭祀のイメージをもっていたと思われる。また、朝鮮には水神祭祀説話も存在し、それが沈清伝の根源説話として存在することも否定できない。しかし、沈清伝の龍王はすでに力のない存在であり、上帝の命によって沈清を庇護している。サヨヒメ説話にある、仏教による在来神の調伏という基調は沈清伝には見られない。沈清伝の龍王は天帝の支配下にあって、絶対服従の姿勢をとっている。

パンソリ聴衆の変化とともに、沈清伝にあらわれる神・人関係も変化した。水神の巫女としての機能を潜在的にもっていたはずの沈清は、民俗的色彩を残しながら儒教的な「孝女」へと変容し、従来の神の機能までも含めたいわば儒教神としての性格をもたされる。そしてabが沈皇后の徳を讃えて終わるように、沈清は儒教道徳の中の孝の徳目を司る女神として生まれ変わるのである。

○盲人の物語

沈清伝に登場する盲人の物語は、ア子育て・失墜等の日常生活の

苦労、イ再婚相手の背信、ウ盲人宴と盲人全員の開眼に大別できる。アは基本構造から存在し、イの部分は語り物としての成長過程で現在のかたちに発展していったと思われる。父と押しかけ女房ペンドクの挿話は悲惨一方の説経節とはちがい、活き活きとした笑い話でありながら、盲人ゆえに藁にもすがらねば生きていけない父の惨めさを、滑稽さによっていっそう浮き上がらせる効果をあげている。ウの開眼説話は中国・インド説話の中にも表れるが、それを盲人全体に拡大した盲人宴、盲人全員の得明という結末はどのような人々によって構想されたのであろうか。説経節と同じくパンソリの場合にも、語り手と盲人社会との特別な関係があった可能性も除外できない。しかし、盲人全体の開眼物語は、父と娘を一体とする主人公の成功譚を強調する過程で挿入された可能性もある。儒教知識人にとって、孝女の成功は、孝女を生み出した父の成功によって完結するものである。ａｂは父の身分を一挙に上昇させ、特にａは父の栄華の非常に長い記述で終わっている。孝女の成功が王との結婚であるならば、その父の成功は盲人で表される社会全体にその徳を敷衍する孝女の父として、絶頂の中で大往生することであったのではないだろうか。

五、結　び

日韓で比較対照されるサヨヒメ説話と沈清伝は、構造的には類似の要素をもちながらも、その社会の価値観によって全く異なった展開をしている。両作品の構成要素は以下のように比較できる。

○共通の要素

出生譚（子授け祈願、夢のお告げ）、片親の死、親の失明、身売り
孝行、異郷への旅、水神の生贄、再生、親の開眼、富貴栄華

○サヨヒメにあって沈清伝にない要素

女主人公：艱難辛苦の旅、帰郷と原状回復、弁財天への転生
盲目の親：嘆きの末の失明と放浪
その他：村神祭祀、法華経の功徳、大蛇の得脱、大蛇の前世譚

○沈清伝にあってサヨヒメにない要素

女主人公：出天之孝女、開眼の代償としての身売り、王との結婚
（＊結婚モチーフは奈良絵本には存在）
盲目の親：貰い乳の苦労、失墜、異人による救出と得明方法提示、
悪妻の背信、盲人宴への旅、再婚、最高位への上昇
その他：龍宮譚、上帝の援助、神仙の保障、盲人全員の開眼

物語の構造や強調部分は、社会の求める価値によって変化する。サヨヒメと沈清伝の基本構造は類似しており、その構成要素には非常に多くの共通点がある。しかし、物語を語り育てた社会のもつ価値観が異なっていたために、サヨヒメでは仏の力が強調され、沈清伝では孝という徳目が強調された。また両作品には複数の共通母型が考えられるが、構成要素の幾つかは後に挿入されて結果的に構造の類似をもたらした可能性もあり、現在の段階ではこの二つの説話に交流関係があるとは断定できない。サヨヒメは基本的に仏教による邪神調伏の物語であり、孝徳物語としての旋律は希薄である。孝

徳は中世日本の仏教説法の中でひとつの価値として物語化されたが、近世日本の物語文学は神・人の関係から人間社会そのものへと主題を移し、描写においても倫理や道徳ではなく人間の内面で葛藤する悪の問題へと進んでいく。近世の文学や語り物の世界では、孝女は孝女であるというだけの理由では補償されない。

一方、沈清伝は、原初に仏教による邪神調伏の主題があったとしても、それは初期に消えさり、人間社会の孝徳物語として展開した。朝鮮王朝後期の儒教倫理の強要とその内在化、パンソリ作者と聴衆の上層への拡大が、初期パンソリの素朴な孝女を孝の極致にまで祭り上げ、成功譚の長い結末をもたらした。その一方で、父の再婚譚などにみられる滑稽さが追加されることによって登場人物に陰影が生じ、単純な孝徳譚の稚拙さを乗り越えて、人間のもつ二面性が増幅され、物語としての完成度が高くなっていることも事実である。

語り物は聴衆によって内容が変化していく芸能である。私たちはその変化の経路を逆に辿ることによって、当時の民衆の意識にせまろうとしている。身売り孝女の物語は日本の近世民衆には好まれなかった。それは説経節を語り伝えた芸能集団が、戦国後期から徳川幕藩体制確立の時期に、どのような社会的位置づけをされていったのかという問題とも深く関わっている。聴衆と語り手とが一種運命共同体的な社会にあった時代から、両者の関係に質的な変化のおこった時代へと、歴史は転換期を迎えていたのではないか。聴衆であった平民の体質の変化が、サヨヒメから魅力を失わせ、一途な恋にはしる男女や稀代の悪人たちが、近世日本の人々を圧倒していく。

一方、朝鮮の人々は身売り孝女に涙し、滑稽な父を笑いつつ、パンソリを芸能として楽しんだ。表面的には徹底した儒教社会であった朝鮮王朝時代に生み出されたのが、春香と沈清という女性像であったことは興味深い。昔語りでは可憐な賤民・平民の娘であった春香と沈清は、パンソリの質的変化とともに、儒教道徳を代表する烈女・孝女へと神格化された。しかし、このような物語の変容にもかかわらず、春香と沈清は現在もなお、か弱い民衆の娘として認識され、愛されている。歴史上の女たちよりもはるかに有名で人気のあるこの二人の女主人公の物語は、常にドラマやオペラとして上演され、子供向けに出版されている。そして、春香の愛妾としての成功や、沈清の父の栄華といった儒教的な後期パンソリの後日譚はすべて消去され、春香は愛の物語として、沈清は可憐な孝女の物語として伝え続けられているのである。

注

(1) 観音寺縁起については拙稿「聖徳山観音寺縁起説話の形成と変容」『朝鮮学報』一五八を参照されたい。

(2) 柳琴『家庭見聞録』に「先親（柳振漢）は癸酉年に湖南地方に旅行……翌年に戻って春香歌一篇を書かれたが、そのために当時に儒者たちの非難をうけられた」とある。金東旭『春香伝研究』延世大学出版部、一九七六、七七頁。

(3) 例えば高宗の前で唱った世襲巫家出身の李東伯は、通政太夫（正三品、堂上官）まで登った。李杜鉉篇『韓国民俗学概説』普

成文化社、一九七九、三七六頁。

(4) 申在孝（一八一二―一八八四）は現在の全羅北道高敞郡高敞邑に生まれ、学問と治産に才を発揮してパンソリ広大のパトロンとなった。中人階級の彼には身分制度上の数々の規制があり、最高の職位は戸長にすぎない。そのため彼の作品には両班の形式主義に対する批判的な面と、支配階級的な思想的傾向の両面がみられる。

(5) 金台俊『朝鮮小説史』清進書館、一九三三。本稿で使用する平凡社東洋文庫版は一九三九年の学芸社版の訳。金泰坤『黄泉巫歌研究』創又社、一九六六。申東一「沈清伝の説話的考察」『陸軍士官学校論文集』七、一九六九。印権煥「沈清伝研究史とその問題点」『韓国学報』九、一九七七。鄭夏英「沈清伝の題材的根源に関する研究」ソウル大学博士論文、一九八三。

(6) 趙東一「沈清伝にあらわれた悲壮と滑稽」『啓明論叢』七、啓明大学、一九七一。

(7) a：完板乙巳本（上下七一張本、朴魯春。金根洙所蔵）を現代ハングル表記に改めたものから訳出。推定年代一九〇五年。崔雲植『沈清伝』詩人社、一九八四。b：「沈睛歌」。姜漢永・田中明訳注『パンソリ』平凡社東洋文庫四〇九、一九八二。推定年代一八七〇年。c：朴順浩蔵書『ハングル筆写本古小説資料叢書』七三、四二九―四六五頁を現代ハングル表記に改めたものから訳出。劉永大『沈清伝研究』文学アカデミー社、一九八九。初期沈清伝の特徴を最もよく表しているといわれる。d：叙事巫歌「沈清クッ」。申東益「巫歌沈清伝」『韓国民俗学』四、韓国民俗学会、一九七一。江陵地方のイ・クムオク巫女の口述を記録したもの。沈清クッは東海地方の豊漁祭や別神クッの一部分。現在では江陵の端午祭でのみ毎年上演される。

(8) 鄭夏英前掲論文五三九頁。

(9) 劉永大前掲書一三七―一三八頁。

(10) 尹光鳳『韓国演戯史研究』イウ出版、一九八五、一三七頁。

（やの・ゆりこ／東京女子大学非常勤講師）